



1992年(平成四年)
10月号(No. 569)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 登山活動、幸先良いスタート……(1)
海外の山……(2)
「二つの登山の話」
ナムチャバルワ短信……(2)
1992年日本・中国ナムチャバルワ登山隊壮行会ひらかる……(3)
新・山研だより(3) 山研上棟式報告……(3)
東西南北……(4)
「今西錦司元会長追悼」「アルパイン・クラブ ライブラリーの紹介」ほか
計報 見学文……(6)
図書紹介……(7)
「還らざる者たち」「北アルプス 上」報告……(9)
「自然保護委員会の行動指針について」「クリーン度の高いナムチャバルワ登山隊」「ビアパーティー」
会務報告……(12)
ルーム日誌、会員異動、山研・ナムチャ合同募金応募状況、書籍・雑誌受入報告、新入会員(復活)、住所・住居表示変更
お知らせ……(14)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテラップ電話

3234 六六五九

九月八日、重廣・梶田・三谷・佐藤の四名の先発隊がラサを出発し、九日ベースキャンプに入りしました。今回は過去二度のキャンプ入りより、大部時期が早い

ナムチャバルワ第六信

登山活動、幸先良いスタート

九月二日、登山隊は北京に入りまし。休む暇もなく、夕方には「歓・送行会」が行われ、病氣療養中であった史占春中国登山協会主席も元氣な懐しい姿を見せていました。

三日には中国登山協会との最終の打ち合わせを行い、本隊・総指揮部隊・名誉総隊長隊・支援隊についての細部におよび決定をみました。中国登山協会からは、すでに二名が船便・アナカンの隊荷とともに北京を出発してあり、いずれも九月六日頃にはラサ到着とのことであった。

途中、成都を経て、六日には九月のラサ貢嘎空港に到着。洛桑達瓦

中国側総隊長、桑珠登山隊長、その他大勢の人達の出迎えを受けました。

ラサは連日の雨で、そこかしこに水たまりができており、モンスーンの最中であることを実感しました。ただ、飛行機の窓から厚い雲の上に浮かぶハギラペリVハナムチャバルワVの鋭峰を見ることができたのは、久しぶりでした。

夕方には、早速チベット登山協会にて、チベット自治区人民政府主席、副主席、自治区政協副主席、自治区政府副秘书长等のもとに会見が行われ、登山隊を代表して洛桑達瓦総隊長が、今年のナムチャバルワ登山にかける決意

を表明、続いて日中双方の隊長が隊員紹介を行いました。

その後、場所を移して約八十名の人達が参加し、歓迎会が夜遅くまで催されました。

翌七日の朝の打ち合わせで突然、本来ラサ留めにし、ラサで分配、調整すべき個人装備および一部の通信機器、その他を含めて隊荷の全てがベースキャンプに直行した、とのことを知りました。

そのため、登山隊は十日にラサを出発、十二日ベースキャンプ入りの予定を急遽変更して、先発隊が八日に出発し、途中、八一鎮に一泊するのみで、ベースキャンプに直行、隊荷の整理、本隊の受け入れを行うこととした。

いつもながら、あれほど打ち合わせをし、連絡を取っていても、「今回もまたか」という感じです。

いせいか、周辺は緑一色で、実にのどかな雰囲気です。

それにつけても、悪天の間にかい間見るナムチャバルワは相変わらず猛々しい姿をのぞかせます。

九日夕方から、少人数ながら隊荷の仕分け、整理が始まり、十日午後には後発の本隊を迎えることができました。ベースキャンプ入りは予定より二日早くなりましたが、降雨の合い間をぬっての作業で、開村式は当初の予定通り十四日となりそうです。

しかし、キャンプ2までの隊荷を運ぶ民工(ローカル・ポーター)は、明日から十八名がキャンプ1への荷上げを開始し、そういった意味では幸先良いスタートと言えるでしょう。

一日も早く、モンスーンが明けて欲しいものです。

九月十日

重廣恒夫・記

(ベースキャンブより読売新聞社のインマルサットを使用し、ファックスにて送稿したものです)。

ナムチャバルワ短信

隊の行動

先発隊の行動は九月二日、十二・〇〇張江援・顔金安が二台のトラックでアナカン隊荷・チベット登山協会の依頼物資・インマルサットを積み込みラサに到着。船便隊荷は五つのコンテナに入れ九月一日西寧に到着、九月三日西寧出発の予定。

報道隊の空輸のインマルサットは上海をへて成都に到着。

チベット登山協会のメンバーがラサよりキイカルにいたり、道路のトレースおよび修復作業を実施している。

(九月三日 北京 重慶隊長より受信)

一、歓迎会

九月六日、Pm五・〇〇より登山協会にてチベット自治区主席・副主席・自治区政協副主席・自治区政府副秘書長等の出席のもと会見が行われた。

登山隊を代表して洛桑達瓦総隊長が今年の登山にかけの意気込みを披露、両登山隊長が隊員の紹介を行った。

その後場所を移して約八十名の人が参加して歓迎会が夜遅くまで行われ

海外の山

二つの登山の話

テレビのドキュメンタリーで、義足のクライマーの姿が映し出された。

マサチューセッツ工科大の研究者であるクライマーは、十代の時、山で遭難、救出されたものの、両足を膝の下から失った。

足のない自分を、悪い方向に考えなかったのが、この研究者の強みだった。

用途に応じた義足を、彼は自分で考案したのである。歩く時のもの、走る時のもの、そして岩を攀じするための義足。

ハンゲした壁の、小さなでっぱりに足先をかけ、信じられないほどの軽さで、彼は岩を楽しむ。両足がないとは、とても思えない明るさ、強さなのである。

「彼を障害者と思ったことはない」と妻は言い、今は義足用ランニング・シューズの考案で、フルマラソンの記録への挑戦をねらう夫に声援を送っている。

以下は日本でのことだ。

父親をガンで亡くしたイギリス人、オリバー・クリソード(三〇)が、チャリティー・ハイク「日本の屋根」への挑戦を開始したのは、八月二十九日だった。

富山県黒部市をスタート地に、槍、穂高、乗鞍、御岳、仙丈と日本アルプスを北から南へ縦断、九月二十六日、北岳にたどり着き、支援者たちの激励を受けた。

東京でコンピューター技師をしているオリバーの父、ディンは、喉頭ガンの手術後、声を出せず食事も流動食

だけ、という状態だったが、二年前、周囲の人たちに励まされて妻と共に息子のいる日本にやって来た。山好きのオリバーから日本の「山岳信仰」のことを聞き、富士山を見に出かけた。帰国後間もなく、ディンは亡くなった。そして、父の最後の日々に慰めを与えてくれた日本の山々を舞台に、クリソードはチャリティー・ハイクを考案ついた。登山をしながらのガン研究募金である。

「赤石岳は、東京の国立ガンセンター」など、山ごとに募金の送り先となる日英の医療機関を指定、共鳴した者は、あらかじめ好みの山名を選んで金額を申し出ておき、クリソードが登ったら事務局にそのお金を送る、という方法。山は富士山など十二座、医療機関は八つとした。金額は、全く自由、いくらでもいい。

「九月五日、立山登頂。立山を代表するチャリティーの旗(英国国立ガン研究基金)を前に写真を撮った」など、東京の事務局には携帯電話でクリソードの行動が報告されてくる。 TENT を背負っての単独行。五十万円の行動資金は、自前だ。

事務局の話では、支援金の応募状況は率直に言って、あまり思わしくないらしい。発想はいいが、システム自体が日本では知られていないのと、対象となる研究機関自体も「支援される」ということに、慣れていない。

チャリティー・ハイク「日本の屋根」は十月十日太平洋に抜けたところで終了、二十三日には、東京・新宿でスライド・ショーが開かれる。関心のある人は、☎03(3821)8035、河岸方へ。

登山の勇氣と社会参加。足のないクライマーと、他者のために登るチャリティー・クライム(ハイク)の話を知りて、そんなことを考えさせられた。(江本嘉伸)

海外の山

二、行動の変更

九月七日、朝の打ち合わせで本来ラサ留めにすべき隊荷がそのままベースキャンプに直行したとの報告を受けたので以下の変更を行う。

九月八日、先発隊 重廣・梶田・三谷・佐藤が出発、八一鎮に一泊したのちキイカルに到着、荷物の選別を行う。
九月九日、本隊 山本(一)・青田・山本篤・小島・飯田・報道隊全員 中国側登山隊員(高所協力員は六日に出発

ずみ)・総指揮部・ベースキャンプ要員が出発の予定。
(九月七日 ラサ 重廣隊長より受信)



日中国交正常化
20周年記念

一九九二年日本・中国 ナムチャバルワ登山隊壮行会ひらかる

日中国交正常化二十周年記念「一九九二年日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊壮行会」が八月二十一日、東京・市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷(私学会館)で開かれた。

この日本側登山隊の壮行会には、関係者、会員らあわせ約二百四十名が参加。

小倉茂輝総務担当常務理事の司会で進められた式次第では、まず今西寿雄登山委員会委員長(前会長)が主催者として挨拶したあと、橋本龍太郎登山隊長名譽総隊長が、「皆さんの激励を受け、隊員一同、同一目的に向ってまい

進します。登山隊が成功をおさめ、帰国するまで、よろしくお願いいたします」。来賓の奥田興志清文部省体育局長が、「日・中両国の協力により、ぜひ初登頂をはたし、世界の登山活動に寄与すると同時に、日・中スポーツ文化交流を深めて欲しい」と、挨拶ともども登山隊員を激励。

次いで清水正夫日中友好協会副会長、斎藤一男(社)日本山岳協会会長、張愛平駐日中国大使館文化部長、齋官、島田公博読売新聞社運動部長、斎藤惇生登山隊総副隊長が壇上で鏡割りを行った。酒は銘酒「末廣」。



壮行会で隊員紹介する重廣隊長

壮途を祝っては、片山健二NHK報道局長が、「総合力を発揮し成功を祈るとともに、隊員、同行者の安全を念願する」と、乾金音頭をとった。

また来賓の加藤博久読売新聞社専務取締役編集局長は、「昨年の貴重な経験を生かし、今年は朗報が得られるものと期待しております」と、激励の言葉を述べた。

会食をはさんで重廣恒夫登山隊長から、山田二郎総隊長、斎藤惇生総副隊長以下、山本一夫登攀隊長、三谷統一郎・青田浩・山本篤・佐藤正倫の登攀隊員、梶田正人・小島彰・飯田肇の各隊員について、略歴をかねた紹介がなされ、読売新聞社、NHKの報道隊もそれぞれ紹介された。

また昨年、国際映画祭特別賞を受賞した、NHKスペシャル「七七八二未登峰・ナムチャバルワ」のビデオも映写され、参加者に深い感銘を与えた。

最後のお礼に立った山田二郎総隊長(会長)は、「①昨年の経験を生かし新思考で取り組む②アルパインクラブの原点に立ち、次の登山の契機としたい③日中国交正常化二十周年に止まらず、両国の友好に貢献したい」と、どの決意を述べ、会を締めくくった。

なお、登山隊は九月二日、成田を出発、ラサで中国隊と合流、十月中旬、未踏のピークにアタックを開始する。
(写真・小倉厚/文責・高田真哉)

新・山研だより(3)

山研上棟式報告

山研改築特別委員会

東日本各地が、フェーン現象により、軒並み今夏最高気温を記録した九月三日午後、別世界のように涼しい、秋雨の降る高大地で関係者による上棟式が行われた。

東京から三台の車に分乗して参加した山研改築特別委員会のメンバー十二名は、途中、沢渡で安房峠を越えてこられた藤平委員長と合流、昼過ぎ上高地に到着した。

下界の炎暑とはうってかわって、釜トンネルを抜けると、秋雨の降る上高地は、さすがに涼しい別世界であった。一行は西糸屋で昼食の後、一休みして山研の工事現場に到着した。その誰もが、林間に聳え立つ堂々たる建物に、まずド肝を抜かれた。山研委員のメン

バーは、図面でも検討し、地鎮祭や、ウエストン祭の折にも現場を見ているので、大凡のイメージをもってのぞんだ訳であるが、その想像を遙かに越えるスケールの大きさに先ず驚かされたわけである。これで一億を超える資金が必要ながよく理解できたという

のが、正直のところ皆の実感であった。

三時からはいじまる上棟式には、本会関係者十八名、これに松本土建(株)大江棟梁以下工事関係者十名が参列して行われた。神事に先立ち、建物の最上部にとりつける棟板の揮毫を依頼された藤平委員長は、自ら、

巨体をみせた新・山岳研究所

平成四年九月吉日 日本山岳会建之 天長地久四海波静曲尺式寸之水
と揮毫され、引きつづき地元の

神主により神事が行われ、最後に工事の安全と立派な山研の完成を祈念して乾盃が行われ、午後四時上棟式は滞りなく終了した。

上棟式を終えた一行は、現場で工事を監理するために残留する太田委員をのこし、山研の完成を楽しみに、秋雨に烟る上高地を後に、残暑厳しい下界の人となった。

参加者 藤平委員長、松田、吉村、小倉、石橋、太田、中村、坂本、溝口、小川、堀、奥原教、奥原幸、青木の各委員、田中副支部長、森フィルム委員、嶋原夫人、中村夫人、以上十八名 (松田)



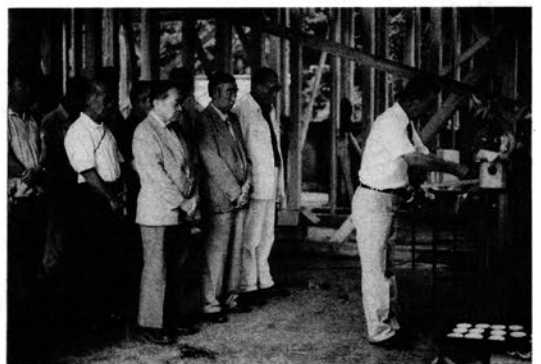
一五〇〇山登頂

一五七七日静養後逝去の

今西錦司元会長 追想

一六一五 富田健一

五月二十八日は八回目のお見舞であった。その日も三、四、五回目に伺っ



新・山研上棟式風景

た時と同様静かにひるね中であつた。枕辺に付添って居られたご長子夫人に「お起しにならないで」と申上げすぐおいとましたが次回にはいつぞやのよう目覚めておられて山の話などについて一言二言お話がきけるものと楽しみにして帰つたのであつたが、その十九日後にテレビニュースで悲報をきこうとは。いつ伺つても実に静かな面持ちで二言三言洩らされるか安眠中であつて、苦しみとか痛みを訴える表情など一度も拝見したことはなかった。昨秋十一月二十九日伺つた時、末女の皆子さん(本会々員)が枕頭に居られ「今日で二三九日目なんですすが床づれは一回もしてないです」と仰つて



昭和 52 年 12 月 3 日 JAC 年次晩餐会にて

いた。白内障をこじらせて視力の劣いが強かったので満九十歳のお祝いに持参したドライフラワーも枕辺に置いて頂くだけになったが、目覚めておられる時はよく話を理解されていた。山の話以外では時たま話をとりちがえされることもあったらしいが私がお話できた四回にはいつも明瞭に「有難う」とか「待ってます」「皆さんによろしく」と仰っていた。

一五〇〇山登山の疲れを一五七七日の静養ですっかり治されたあと、新しい世界で次の好きな研究をするため静かに乗り移られたような感じのご最後だった。

顧みれば昭和十年、関西支部創設の

翌年からの細くて長いお近づきであった。その年支部の三理事制の一人として高橋健治氏と交替、就任された時常任委員制度をとられ加納一郎、宮崎武夫、松井久之助氏と私がその任を受けたのである。氏は理事就任前から関西小集会あるいは関西研究会において雪山崩の自然発生の分類とか板状雪崩、冬富士などについて貴重な発表を続けて居られた。その影響をうけて私はその後冬山遭難事件のある毎に雪崩発生箇所、時間、方向、風向、気象状況を陸測図の上に細かく記入、一人旅の多かった自分の山行に最重要の注意事項として残しているのであった。

夙くに出された今西錦司全集にある学問上の研究論文にはご縁がなかったがその他の山岳関係の研究、資料、指示には深く教えられるもの数々あった。生涯の師と出来たことは誠に仕合せであったと喜ばねばならない。また支部は成立後程なく日中事変、第二次大戦の渦中に入り会の動きがままならぬ状況になったが、今西氏の胸裡に渦巻いていた探検、遠征、研究への熱意は役員会委員会の席上、カラコラムの言葉に凝縮して問題提起された事が屢々あった。

漸く戦後を迎え西堀氏がいち早く渡印し日本隊入国の道を拓かれた。氏は二十七年秋にはマナスル踏査隊長とし

て出かけられマナスル登山ルートを帰られたが、何としても氏にとって最も嬉しく楽しかったのは三十年四月、カラコラムへ学術探検に出かけられた時であろう。この時の世の期待について望月氏が会報一七九に詳述されているし、帰国後文芸春秋新社から出た『カラコラム』に立派な報告が掲載されている(全集には第三巻に)。

戦時中登山界が沈鬱な空気に包まれ出していた折、委員有志が企画した山岳研究講座の計画にも卒先理解を示された上講師の一人になって頂き、また夏期、冬期八日間に亘る講演会が満員盛況裡に終了後、それら講義をまとめて上梓する事になった時も執筆その他の大いに力添えをして頂いて立派な本を出し得た事も忘れられない。

JAC が戦後登山界に新風を吹きこみ支部役員も一新した時「今迄の役員がこのまま会合しないのは淋しいなあ、年二回位集らうやないか」といわれ春秋会というのを三十八年まで続けて交流しあった事があったが、会員が次第に病欠などで減って解散してしまった。春秋会に出た人々も関西では今西、富田が最後となっていたが、その今西氏が欠けたことに依り、戦前関西支部の支柱となっていた方々は一人も残らないことになってしまった。最後の畏友を失ったということは痛惜の

極みであり、寂寥の感はこのばにならず朝夕心臓が刻まれる思いがつづくのである。淋しい、本当に淋しくなった。ご葬儀後再びお詣りに伺った時、陛下が葉山において著名された勲記と勲一等の勲章が霊前に供えられてあった。

自然院寿山萬壑錦峰居士

合掌。

アルパイン・クラブ

ライブラリーの紹介

会報五四四号に Eaton Square に移転した仮 AAC のルームのことが、富田健一氏により紹介されているが、その富田氏宛にこの度、本年四月に、改築なった新ルームへ移転した旨、新しいクラブ・ルームのプロフィールが送られてきたので、ご参考までに概要をご紹介します。

◇所在地

55, Charlotte Road, London EC2A 3QT

◇交通

市の郊外、環状線上、(On the Line of the city) Northern Line, Zone 1 の Old Street 駅から徒歩六分、Moorgate または Liverpool Street 駅からそれぞれ十五分、殆んどの BR 主要駅からも簡単に行ける位置にある。

◆建物設備の概要

外観はスケッチの通りの地上四階建、以前倉庫として作られた建物を一九八七年に改装したもので、総面積五六六平方メートル(二丁四階各二二二平方メートル、地階各一〇二平方メートル)で、旧ルームより大分広く、図書室、講習会等に貸室として使用する室を除いても三二五平方メートルが、クラブ・ルームとして使える広さがあり、ガス・セントラル・ヒーティング、各階にトイレもあり、近くにパブやワイン・バー、駐車場もあると紹介している。

なおこれに関連して、近着のヒマラヤン・クラブのニュース・レターには、ALPINE CLUB LIBRARY [1992 APPEAL] と題して次のような紹介記事が掲載されているので併せて紹介しておく。

世界最古の英国山岳会は、一八五七年に創設され、世界中の有名な登山家

を網羅している。ライブラリーのコレクションには図書以外にも登山史に残

るような資料、例えば、手紙、日記、十九世紀初期のガイド達の案内手帳(Log-Book)、十九世紀のレプリント、パンフレット、写真、代表的な遠征隊の記録、ガイド・ブック、地図等があり、約一〇〇種類のジャーナルが、世界中から集められ、その総数は四〇〇〇〇冊に及んでいる。

この図書室は最近公共図書館として開かれており、郵便物、電話、訪問者による照会に応えている。管理は専従のライブラリアンが、クラブのボランティアの協力を得て行っている。

特筆すべきことは、最近一五、〇〇ポンド(三七五万円)近くの予算をかけて、ヒマラヤン・インデックス(データ・ベース)が創設されたことである。この中にはヒマラヤ、カラコルム地域での一八一八年以降の六〇〇〇以上のピークに向



新しいACライブラリーの外観

計報

見学 玄氏(会員番号一八八二)

本会永年会員、見学玄氏は、かねてより病氣療養中のところ、八月十三日、パーキンソン氏病により、逝去されました。享年八十三歳。葬儀・告別式は、八月十六日、三鷹市下連雀の禅林寺で行われた。(喪主は妻

フミさん)

氏は、戦前より三井銀行山岳部の幹部として活躍され、停年退職後は『三井銀行百年史』の編纂等にも活躍された。

晩年足がとおろえてからは、俳句をよくされていた。謹んでお知らせ致します。(Y・M)

た三五〇〇隊に及ぶ登山隊のデータが収納されている。これはヒマラヤ地域へ出かける者に対してのライブラリーとしての最初のデータの提供である。

一九七一年には、アルパイン・クラブはプロ・ベースでのライブラリー運営のための募金口座を開設した。即ちアルパイン・クラブの集めた諸資料は九五〇名のメンバーだけのものではな

麻生武治先生への返信

拝復

素晴らしい残暑御見舞を有難たく拝受しました。満九二年半の御高齢を益々御健勝でお越しの由誠に嬉しくお喜び申し上げます。

既に老秋の小生は拝読しながら青春時代愛唱したリリアン・ハーウェイの

く、公共のため公開されるべきであるとし、それには専任のライブラリアンを雇用することから始める必要があるとして、二五〇、〇〇〇ポンド(六二五〇万円)の募金を開始したが、既に会員より一〇〇、〇〇〇ポンド(二五〇〇万円)が集められている。不足分について一層の協力を呼びかけている。(Y・M)

「会議は踊る」を思い出しました。うろ覚えが間違っていましたらお許し下さい。

Der Kongress tanzt

—Heute Werden alle Märchen war, Heut wird mir eines Klar! Das gibt nur Einmal, das Komm nicht wieder, das ist Vierleicht Treumelei? Das kann das Leben, nur einmal geben, denn jeder Frühlich hat nur einen Mai!

足腰が弱まり寒さも身にこたえる様になりましたので、山スキーは諦め湯河原のみかん山を散歩している程度ですが、最近深田久弥著、ヒマラヤ登攀史第二版(岩波新書、一九六九)を読んでいます。ヒマラヤに残された八〇〇〇級の未登峰に挑み、辛苦犠牲を克服して初登頂を勝った岳人の記録を読んで感激し時を忘れるのも老秋の身に許されるアルピニズムの様に感じております。

此上共益々御健康で過されます様念じつつ呈上致します。Auf wiedersehen 再見。

一九九二年八月十八日

敬具

山口一孝拝

麻生武治先生

一九九二年、夏・千丈沢

宇都木慎一

三Kと敬遠される山岳部に新人七名活気がもどる

寺内も松川も逝きて十八年南岳飛驒側深雪の春

あの時の四君は亡く安らかに眠れよ山に我らを見守り

静けさを求めて山に來し我ら喧騒を背に新穂高を発つ

放牧の牛は草を食む黙々と穂高平の静

謠の中

滝谷の岩場は見えず霧の中八月の山沢すじの路

夏山の初日は厳し重き荷に新人はあえぐ槍平を前に

槍ヶ岳を仰ぐ千丈乗越で山知り初めし若き人らと

飛驒沢を辿りて到る千丈の沢に憩いて小槍を仰ぐ

― 法政OB福重憲嘉君を偲びて―
黒々と雄々しき北鎌殿しさのゆえにわが友春雪に消ゆ

真向いに赤き岩肌眺むれば硫黄の匂いやすかに漂う

早晩のもやの中雪溪を登れば眼下に雲海なびく

夏の日の深き緑に包まれてひとり山を下る飛驒の高山へ

Chiral 便り

暑中お見舞い申し上げます。

七月二十四日から五年ぶり、同行のワイフは二十一年ぶりにチトラルに入りました。旧婚旅行というわけですが、会員の画家岩切泰氏にエスコートしてもらいました。

トリコー河水源のシャージナリ峠付近に一週間テントを張りクーアンハ(六二三〇呎)やラホゾム(六五〇〇呎)などの絵を描いたり、写真をとったりしたところでした。

きびしい旅でロートルにはつらくないました。

八月二十日受付
『山』編集担当宛
(雁部貞夫)

図書



紹介

還らざる者たち

原 真著

著者の半生にわたるあまたの海外登山を年代順に並べたものだが、「山を舞台にして人間を書く」ねらいで旧稿全部を書き直し、ハードボイルト調の緊った文章で読者を惹きつける。著者の興味と関心がひろいので多くのエピソードを交えた内容が多彩である。自然の描写も鮮烈で、久々に踏んだ南米の土の臭いに感動するなど著者の官能的な感受性も表われている。しかし著者は無類に論理的で人一倍自己主張の強い人物だ。本書のもつ強いダイナミズムは、著者と周辺の間に生れるテンションが赤裸々に書かれたことに由来するに違いない。

題名は若くて逝いた友人への愛惜を示すが、彼らにくらべ著者自身の長い登山人生への思いもこめられていることだろう。五十半ばの今なお八千呎を越して登る現役だ。その息の長さは、剃刀の刃を渡る種類の登山には手を出さなかったのと、いつも自分自身の登山を創造してきたことと関わりがある。これこそ著者の登山の身上といえる。

著者には注目に価する発見がある。七六年のパミールにそれは書かれている。それまで体験してきた包囲法にたいしてその不自然さに疑問を持った最中だった。ソ連式登山のシンプルさに登山本来の姿を見たのである。そのシンプルさが登山家個々の高所における速攻能力に支えられていること、次いで高所におけるスピード概念がどんなに重要かに著者は刮目した。植物環境で生れた日本の登山は、戦前英国から知識、戦後はヨーロッパから技術をとられ、岩と雪にジャンルをひらいたが、スピード概念はいつも彼岸に置かれたままだった。著者の刮目は新規で重要なものだった。

パミールから帰国してから、速攻能力を体得するための著者の選択は、平地での低圧室訓練と高所での呼吸法だった。こうして著者は登山家兼「高所実験者」に変身する。大小の隊を主

宰し世界の高山域に赴き登頂をめざすと共に、自他共に被験者となつて訓練成果を確かめる実験を繰り返した。実験は好ルート好天気という典型条件を求める。悪天候を衝き余りにむずかしい登路を攀じては、訓練成果を示す適性時間が計れない。しかし山が天気が時には人間さえも実験者の望む通りに反応してくれる訳ではない。時には隊員が去就に迷うことも起った。(シシャパンマ) 長い実験登山期を通じて著者も多く山の頂に立ち多くの収穫を得たが、五十を越してから他人を被験者とするこの特異な登山に倦いたのか、その頃の記述に「山がいやになった」とも記した。そして自分本位の登山に還る。最終章の「再訪マカール」がそれだ。著者流の山の遍歴の終着駅といえる。

本書はユニークな山歴を様々な山行の姿で在りのまま書く。とくに実験登山がもたらす喜びと苦悩と失望をこのように綴った本は他にないだろう。著者がつくった「高所型改造人間」が羽ばたくように登るのを見る喜び。それは中世の錬金術師の心に似通っていた。また若い彼らの純真な協力も嬉しかった。しかし離反もあった。彼らも自分の道を歩きたいのだ。文中実名を挙げて、離れようとする若者を著者が訓戒するくだりがあるが、著者の怒りが生に伝わり罵声に聞えて、評者は気がかりになった。しかし著者は自分の弱点を「短気で怒鳴りやすい」と書いているので、さきに述べたように著者自身の姿を生で書くのが本書の大切な主旨でもあった。至る処に著者の気合いが感じられる。気合こそ本書の持ち味といえるだろう。

一九九二年七月二十五日 懶悠々社
刊 三〇〇頁 定価二五〇〇円
(田口二郎)

北アルプス 上

信濃毎日新聞社
編集局編

本書は、創業約百二十年の歴史を持つ信濃毎日新聞社が、日本アルプスをかかえ、伝統的に山岳関係の報道に力を入れてきた背景を元に、山記者の総力を挙げ、毎週ほぼ一回の割りで約三年間、新聞紙上に記事を載せてきた北アルプスの部分を本にしたもの、その上下二巻のうちの上巻である(下巻はこの九月に出版される)。

三年がかりのため、取材された人の年齢が現在と違っている点はあるが、新聞紙上で毎回楽しませてもらったものの以上に、カラー写真も比較にならぬほど綺麗で、楽しい読みもののある写

探検と学問の分野に
特異な足跡を残した巨人の実像に迫る

評伝
今西錦司

本田靖春 ●好評発売中!
●定価1900円(税込) 四六判上製/384頁

1992年6月15日、独自の進化論を提唱した京大名誉教授で、文化勲章受賞者・今西錦司氏が亡くなった。享年90歳のことである。氏は京都・西陣の大きな織元に生まれ、1中・3高と進学するなかで多くの俊英の知遇を得、やがて登山と探検に卓抜したリーダーシップを発揮する。一方、志した学問は一分野にとどまることなく、独自の自然学を提唱するに至る。そんな自由奔放に生きた今西錦司氏の足跡を追いな

ら、巨人の実像に迫るノンフィクション。

山と溪谷社

〒105 東京都港区芝大門1-1-33
☎03(3436)4055/FAX03(3433)4057



真集になり、ガイドブックにもなっている。

これまでの大手出版社などから出たものと違い、地元の利を生かし、単なる有名人だけでなく、時流に流されずじっと地元で頑張り、地道に成果を上げてきた人からも情報を集めるなど、通俗的な綺麗ごとで終わらせなかった点が充分、汲み取れる。このため利益優先の出版社とは違う、地元への暖かみを感じさせる本ともなった。

寺島今朝一が案内人だったなど、多

報告

「自然保護委員会の行動指針」について

自然保護委員会

本年度の自然保護全国集会(滋賀県朽木村、朝日の森)で、別掲のような我々の「行動指針」が採択された。この指針は当面我々の行動の指針であるが、この全国集会での大森・自然保護担当理事の挨拶にあったように、我々の行動を通じて一般の全会員の理解をはかり、将来は「日本山岳会の自然保護の理念」となるように努力するためのものである。この紙面をかりて、このような行動指針を定めたいきさつを紹介したい。

平成二年度の全国集会(三島市、箱根の里)で全国の地方支部における自

少の調査不足の面は別として、このような本が出版されたことは、地元関係者として嬉しい。

上巻は北ア南部、下巻は北ア北部でこれからの出版だが、どちらもほぼ同じ体裁のようである。値段の方も、この手の写真集を考えると、手ごろではないかと思われる。

一九九二年六月 信濃毎日新聞社出版部(二三八〇長野市南東町六五七) 第四変 上巻二二二頁 カラー一七六枚 各巻三五〇〇円(岡澤祐吉)

然破壊の現状報告を受けたなかに、山形支部からの「鳥海山南麓での大規模スキー場建設計画」があった。これに対して、現状調査の上、さっそく行動しよう」との緊急動機が出され、取り上げることにした。

同年十一月の三回にわたる現地調査の結果、建設計画の中心である八幡町の町長宛に「鳥海山南麓での大規模スキー場建設計画の変更を求める要望書」をまとめ、翌年(平成三年)二月に八幡町を訪れて町長に要望書を渡したことは、既に本誌(五五一号)上で報告したとおりである。

日本の近代アルピニズム史上に燦然と輝く不朽の山岳名著

- 日本風景論 志賀重昂
- 日本山嶽志 高瀬 式編
- 日本アルプス 全四巻 小島島水
- アルペン行 鹿子木員信
- 日本アルプスと秩父巡禮 田部実治
- 山行 横 有恒
- 黒部峯谷 冠松次郎
- 山一研究と随想 大島亮吉
- 山と雪の日記 板倉勝宣
- 雪・岩・アルプス 藤木九三
- 尾瀬と鬼怒沼 武田久吉
- スウイス日記 辻村伊助
- ハイランド 辻村伊助
- 氷河と万年雪の山 小島島水
- 北の山 伊藤秀五郎
- 山岳省察 今西錦司
- Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps 日本アルプス登山と探検 ウォルター・ウェストン
- 別巻 山の憶ひ出 全二巻 木暮理太郎 新装増補版
- 解題書
- 覆刻日本の山岳名著 日本山岳会編
- 特別資料
- 日本山岳会「会報」覆刻合本 第一号 第一一〇号

覆刻日本の山岳名著
全18点22冊
解題書・特別資料付
企画・編集・日本山岳会
現金価格195,700円

- 名山圖譜 全三巻 谷文晁
- 迦多賀嶽再興記 播隆上人
- 信州鎗嶽畧縁起 播隆上人
- 石狩日誌 松浦武四郎
- 山岳紀行六種(私家版) 松浦武四郎
- 乙酉掌記 他五種
- 歐洲山水奇勝 全二巻 高島北海
- 富士案内 野中至
- 西藏旅行記 全二巻 河口慧海
- 山水無盡藏 小島島水
- ヒマラヤ行 鹿子木員信
- 剱澤に逝ける人々 東京帝國大學山の會
- 山岳美觀 吉江善松
- 山の繪本 尾崎喜八
- 先蹤者 大島亮吉
- 白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊
- アルピニストの手記 小島島水
- ナンダ・コット登攀 竹節作太
- 山に描く 足立連一郎
- 山岳礼拝(新編集) 中村清太郎
- 解題書「新選覆刻日本の山岳名著」 日本山岳会編
- 特別資料
- 日本山岳会「会報」第二一〇号
- 播隆上人筆「鎗ヶ嶽繪圖」

新選覆刻日本の山岳名著
全20点29冊
解題書・特別資料2点付
企画・編集・日本山岳会
現金価格180,250円

大修館書店

● 分売はいたしません。

〒101東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)3294-2221(大代表)

在庫僅少!

この「要望書」の作成に当たり、委員会の討議の時に意見が大きく分かれた。それは、「日本の山岳が世界的にみても貴重なものであり、我々はこれを守って子孫に伝えるべきである」といった総論とも言うべき前文をつけるかどうかであった。結局、前文をつけて提出したが、要望書としては少し長くなり、肝心の部分の説得力がやや弱くなったことは否定できない。

この時の議論がきっかけとなって、「日本山岳会の自然保護の基本理念」を作ろう、ということになり、平成三年度の全国集会（新発田市）で議題として取り上げた。

これに先立ち、委員会として「理念問題小委員会」（本多、羽賀、池田、近藤、澤井各委員で構成）をつくり、準備を進めた。新発田市での全国集会では、資料として、

①今、なぜ日本山岳会における基本理念か。

②「日本山岳会における自然保護の基本理念」（案）

③会報二二三号（一九六二年）「ともに考えてみたいこと」（松方三郎）

④山岳会設立主旨書（明治三十九年四月五日）

を用意し、日本山岳会として「自然保護の基本理念」が、今改めて問われていることを議題として討論を行った。

「日本山岳会自然保護委員会」 行動指針

一九九二・五・二三

自然保護委員会

地球環境は人類史上かつてない危機を迎えている。設立当初からわが国の自然環境の保全に強い関心を抱いてきた日本山岳会の自然保護委員会は、この際その伝統をさらに堅持するため自然保護について次のような目標を掲げて行動の指針とする。

た。（詳細は、本誌五五五号参照）

各支部の自然保護委員やその他の会員から多くの意見が述べられたが、一応の結論として、

①「理念」の策定には賛成である。

②文章としては、

イ、原案どおりとする。

ロ、別な文章を用意する。

ハ、特に用意しないでも先輩達の残したものを思い出すのでよい。

のいずれかとする。

となった。しかし、重要な問題であるので各地方支部に持ち帰って十分に会員の合意を得て、次回の全国集会で再び討議することにした。

この全国集会の終了後に、いくつかの地方支部から、あるいは参加会員から

一、地球環境を現在以上に悪化させるべきでない。むしろ、健全な生態系の維持や復元に積極的に貢献するため努力する。

二、わが国の山々は、世界的に見ても多様な自然環境を含む貴重な存在である。これを破壊から守って永く後世に伝えることは、現在のわれわれ山岳人の責務である。

三、登山行為には時に自然破壊や干渉を伴うおそれがあることを認識し、行動にあたってはその最小化を常に心掛

ける。

四、山岳地帯およびそれにかかわる自然の乱開発を監視し、過剰な利便性の追求や経済優先策によってわが国の山々が荒廃するのを防ぐため、積極的に行動する。

五、海外登山に際しては自然環境の保全を基本的な条件とし、その国の文化を尊重し、また、人々の生活を乱さないように特に配慮する。

以上

らいろいろな意見が委員会に寄せられた。なかには「理念」よりも「行動」をとる意見もあったが、大部分は「理念」策定に賛成で、文章をもっと簡潔に」との意見が多かった。委員会としても、秩父の山荘で一夜この問題を討議し、同じ様な結論に達した。

そこで、前記小委員会でも再度検討して簡潔な簡条書きとし、事前に各地方支部に送付して意見を求めたところ、さっそく北海道支部（辻井委員）や越後支部（筑木委員）などから意見が寄せられた。これらの意見を入れて訂正した上、本年度の全国集会で再び討議を行った。

討議に先立ち、山岳会の指導層の反響を聞いたところ、このような「理念」

を日本山岳会の「基本理念」として制定することに対しての慎重論もあるようなので、当日の議論はこれを「山岳会の基本理念とするかどうか」に絞って行った。

三時間にわたる活発な討議の中で、「ぜひとも山岳会の基本理念にするべきである」という意見の方が多くあったが、今「山岳会の理念」として策定することに反対する意見とに分れた。反対意見の主なもの、

①将来の我々の行動を束縛する。

②開発と保護の板挟みになっている地方支部の会員の立場が困る。

③最終決定まで時間がかかる。

という意見であった。

この「理念」を「自然保護委員会の行動指針」として採択することにし、前記のように我々の行動で内外に示すことにした次第である。なお、この内容は、確定されたものではなく、順次手を加えるものとした。

現在の自然環境問題を考えるとき、もはや個人の欲望のみによって行動することは許されない時代であることに對する認識の薄い会員がいるのは残念であるが、このような議論を通じて「自然保護」に対する我々会員の関心が高まり、この美しい日本の山岳を後世に伝えることの一助になれば幸いである。

(文責・澤井政信)

クリーン度の高い

ナムチャバルワ峰遠征隊

最近「登る際に出たゴミをすべて持って下山します」といった、クリーン登山を標榜するヒマラヤ登山隊が、しばしば報じられている。遅きに失するという声もあるが、今後は全ての日本隊に、ゴミの持ち帰りが定着してほしいと思う。

ところで、クーンブ地域への登山隊は、今秋期以降は自分達のゴミを母国まで持ち帰るように求められることになった。事前にゴミ供託金が必要とな

り、この四千〜二千ドルの供託金は第三種ゴミがカトマンズから先、母国へと持ち出されてからでないといふ返金されない。ヒマラヤを擁する諸国の、一連の登山料値上げ措置とともに、外国登山隊の入域数を規制し、環境保護をはかることが狙いと思われる。

さて、わがナムチャバルワ峰遠征隊の荷造りに、自然保護委員会もほんの少しだけお手伝いすることができたので、その印象を記したい。

「食糧等について」

徹底して外装を剥ぎ取っていた。重廣隊長の恐ろしく厳格な指示によるという。私も佐藤隊員に見習い、忠実に実行した。アタック用のうなぎの長焼きなどは、原形をとどめないで、C6へ荷揚げされることになるだろうが、断じて私の責任ではない。

ティール・バッグや茶殻の出るようなものは見当たらない。梱包班の中軸となつて奮闘した事務局の滝沢守生君によると、昨年とは雲泥の差の軽量化作戦という。

缶詰類は嗜好品として若干だけ入れたが、前年は持参しなかった由。気になったのは、唯一プラスチック製の缶つぶし器、あれでEPIIのガスのカートリッジ缶をつぶせるかな？頑丈なのを一つ自然保護委員会から、寄付したいと思った。

別の日、手伝いに来たS嬢の感想も伝えたい。

以前、彼女が南米に遠征したとき、ドイツ隊としばしの間連れ立ったが、ほぼ同人数のドイツ隊の隊荷は少なく、ラバは、日本隊の半数だった。彼らの食事内容は、乾燥食品が主で粗末に見えたという。食に対する、国民性の相違であろうか。現地の環境への配慮は、椰子の実際の洗剤を使用するなど、過敏なまでに行き届いた心配りがあるように見受けられた。

「梱包資材について」

大半の遠征隊の装備・食糧等が集積されている日通の品川埠頭倉庫に最初に入ったとき、見慣れないものが目に飛び込んだ。青色のプラスチック製のドラム缶で容量は、一個五〇リットル、形状はビア樽を少し大きくした感じで、鍵も掛かるし手提げも付いている。それが一五〇樽位は並んでいる。もしやこれが、メスナー隊やヨーロッパ勢の登山隊が使用しているというプラ樽かと思ひ、滝沢君にたずねると、そうだったという。

下山時には、焼却できないゴミ等がこの中に収納して下ろすのだという。ダンボールやプラパールといったもので、ゴミ類を包んだのでは、ポーターが確実に下ろしてくれる保証はない。しかし、誰しもが欲しくなるようなこ

●講演会のご案内 自然保護委員会

「登山者による自然破壊について考える」―大雪山の研究から―

日時 十一月十九日(木)十八時三十分

場所 JACルーム

講師 小野有五(北海道大学教授)氏

●お知らせ

HAT-Jによる国際シンポジウム一九九一年東京会議の報告書(日本語版・英文版)ができましたので、希望者はJAC事務局に申し込み下さい。

(頒価は各二〇〇〇・送料五〇〇円別)

~~~~~  
のプラ樽だと、彼らは背負い下ろし、家で濁り酒の樽やら何やらに使うだろうから、ゴミ下ろしの交換条件で進呈する考えなのだという。

また、中国隊が一九九三〜九四年にかけて、チョモランマの冬期登山を行うのに際して、このプラ樽を寄贈するという。

輸入薬品の外容器だったプラ樽が、三度利用される。何というグッド・アイディアだろうか。私には他のどのようない工夫よりも素晴らしい着想に思えた。因みにこのプラ樽は、C2以上で使用する食糧・通信装備などのすべてを収納し、さらにC3以上では、プラ樽の三分の二大の四角いプラスチック





牛山大六 (三六一) 7・19

山研・ナムチヤ合同募金応募状況

(九月八日現在)

(二十口) 小林太刀夫、山田二郎 (計五十口)、青木義明、(十口) 佐藤和志、渡辺兵力 (計十四口)、入江善一、中島道郎、二木節夫、(八口) 池場孝昌、(六口) 吉川正幸、川喜田二郎、山田勲、古川利雄、長谷川昌美、若林妙子、(四口) 佐近丸彦 (計十口)、矢野弓之介、中島宏、大貫敏史、佐藤一栄、古我亮一・静、内山脩一、古郡弘子、佐藤弥右衛門、西郡光昭、戸村貞夫、渡辺良一、吉武正子、佐藤幸雄、浜崎一成、矢萩久雄、平田和男、木戸繁良 (計十口)、田中義晴・春子 (計六口)、堀了平、平沢利夫、勝山康雄、深瀬一男、東浜義男、(三口) 今野實、篠塚正俊、(二口)、小野有五、倉知敬金子宏、田寺俊治、嶋崎兵市、増本茂、湯川龍二、大阪市大山岳部、秋山光平、桜井昭吉、岩崎恒雄、中村泰一、栗原昭作、吉田宗弘、佐藤知恵子、近藤克二、鈴木進、安東桂三、門脇愛子、尾崎進、武田幸男、砂田定夫、田濱史、姫野和記、早川混、木名瀬亘、吉田光吉、奥村一郎、森榮司、長嶋正浩、所彰、内山城、湯村光典、坂西徹朗、藤田靖二、板倉健二、望月雅郎、神田孝、

赤松光 (計四口)、赤松明德、羽賀育子、柴田昌亮、岡田幸千生、江川利雄、堀江昇、坂井南雄治、柏秀樹、開発秀三、田辺恵造、新井知恵子、進藤昭、久保田明宗、村上慶三、山口曉、平野興一、江藤秀一、山口亮、大田邦介、原本幸二、西岡譲、西郷正郎、横井孝恵、牧野良三、廣瀬誠、西村久志、大谷洋生、高室陽二郎、北村均、砂野耕三、一志幸夫、垣内康時、鈴木晃三、伊東一雄、井上一磨、石下恭子、大槻雅弘、横溝修一、鹿田勝、平井隆之、高村篤生、佐々木康之、近藤良夫、井口正男、諏訪武、関昭一、町田悌、城隆嗣、佐藤春郎、吉田寛治、長尾悌夫、遠藤登、石岡繁雄、福島幸太郎、田村将、宮田収蔵、上野壽一、山口能子、遠田篤子、茨木弘、渡辺和雄、渡辺泰夫、松浦勇次、地木誠太郎、海老原道夫、渡辺富衛、浜田好子、宿屋昭二、松尾健、市川章弘、田中政一、斎藤健一、白川義員、藤井英夫、望月阿香美、溝部直樹、田畑郁、山下静江、小野光比古、西村正、鈴木宏、山口克、長谷川紀子、長谷川英夫、関喜代司、倉持内武、影山収、力丸茂穂、平野義明、早川英夫、緑川謙二、平林芳夫、村田恭邦、中田勇、杉山正洋、筒井稔、塚本圭一・幸子、鮑津博史、入谷浩石、酒田昌輝、中山秀樹、塩田裕通、千葉保之、高橋通子、渋谷千秋、村田正春、

岡田米三、新田隆三、石川弘、秋山正人・征子、円満字正和、吉村公一、信州大学学士会東京支部、鈴木茂、平井順子、養原重夫、小野幸、太田新生、杉本賢治、嵯峨野宏、木本哲、松沢憲夫、村上昭三、杉田博、飯寄忠邦、小林年、三上博民、三上智津子、西英二、小松良三、四手井靖彦、有井琢磨、松岡繁、吉野禎造、脇坂順一、石川富康、加藤幸男、杉崎満寿雄、藤野薫、大久保成幸、宮原弘之、村上賢二、白根一、菊地俊彦、宇津宮隆史、奥野幸道、渡辺敏夫、山崎大造 (計四口)、山崎郁郎、佐藤義正、春田俊郎、小貫伸一、田中茂夫、根本紀、川勝弘一、丸茂千クエ (計四口)、関根幸次、高橋信博、皆川完一、大友繁、岡村治明、荒井辰弥、伊藤正俊、(一口) 神谷恭平、原康夫、加賀美均、安藤久男、小泉静子、堀雅裕、田中茂、佐竹春江、加藤正巳、中川公夫、鳩谷貴雄、前嶋信、林芳弘、鶴岡元之助、田中賢治、松村マサ子、松村博行、西岡政人、橋本行雄、篠田公平、津田和己、高橋実夫、荒井奥弘、下田宏、佐々木淳義、廣瀬一隆、大須賀俊彦、池崎藤雄、吉田雅子、小田和友蔵、野々口文子、清水佐二郎、北川豊培、福嶋佑二、坂井広志、熊木貞夫、門倉賢、黒沢孝、高橋庄一、岡本英治、岡田晋、吉見良一、藤本幸一、工藤冲、浅井計一、川戸昭三、猪股鎮夫、木村

友弥、荻野昌宏、神田典昌、伊藤康二、島汀子、増岡栄一、植松晃岳、中廣敏夫、伊藤紀克、足立みなみ、飯沼和男、広瀬幸寛、赤穂誠、江花俊和、佐野孝、長沢愛喜、羽根田二郎、中尾志津子、福嶋一馬、阪本公一、山田一男、酒井展弘、米倉逸生、吉中登、麻生由紀子、井上保、大川清二、林雄吾、奥山和夫、京大医学部登山会、山中茂、杉山泰司、赤澤清明、山路岳夫、上野善宣、田中貞夫、守屋龍男、磯田和夫、稲垣信生、高辻謙輔、内野裕夫、清水紀亨、森丘實、藤本多加志、鈴木一夫、湯浅俊行、新井浩、柴崎徹、上岡謙一、笹川和男、渡辺恭三、大畑恵宥、横田明信、岡村美邦、金澤善八、柳沢須佐男、添田啓一、島田秀夫、濱田壯平、中本環、柏木宏信、林一夫、山本元、丸山猛、会田東、篠崎純一、河阪一造、備前和子、福田正則、正美智子、田中邦彦、増田富三男、井上隆夫、松葉明、三枝明德、久保田直之、尾方慶也、田中榮子、田中哲郎、久保田全、高倉信孝、秋保一郎、森山美理子、岡田俊夫、近藤恒雄、加藤榮、高木志茂子、船山象治、上原泰行、山中富士男、行方正幸、岡田茂久、土合敦彦、曾我恒夫、近藤健治、佐藤徳松、曾根義一、山川力、三堀正純、横山雪男、酒井定勝、須々田秀美、稲垣一郎、古沢衆一、岩谷浩三、武田繁治、中村勝郎、井澤信久、中山茂樹、

長谷部勝也、小島誠孝、田中節子、小栗宏、高岩俊昭、早川紀代、明石貴雄、中島茂、松田謙介、矢澤義弘、福田光、有元利通、堀川清、佐々木善民、山口俊成、瀧山養、沼田正、菅原省司、熊崎皆子、阪下幸一、大久保孟、伊藤禎洋、(〇・六口) 山井朝徳  
(累計一千七百三十三名、五千五百五十五・四口、二千八百四万七千二百二十九人)



3234-6659

この電話で  
お知らせ  
しています

### ●第八回宮崎ウェストン祭ご案内

宮崎支部

日時 十一月三日/九時〜九時四十分  
場所 宮崎県西臼杵郡高千穂町五ヶ所  
行事・式典 献鐘と献花、山岳ミニ講話、山の歌合唱

(式典後祖母山へ一七五六・七)登山/自由参加)

◇前夜祭  
日時 十一月二日/十七時〜二十時

場所 ウェストン記念碑北側広場(農業改善センター)

行事 郷土芸能(夜神楽)・各種バザー・特産品展示即売・キャンプファイア

(宿泊希望者は、五ヶ所公民館を予定(当日申込み)しています。ただし、寝袋持参と自炊)  
連絡と照会先

・宮崎支部事務局

〒880 宮崎市大橋三丁目二六五(大谷優方) / ☎〇九八五―二五―二五九四

・高千穂町役場(総務課)

〒882 宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井一 / ☎〇九八二―七二―三一八一

### ●雪崩シンポジウム

積雪期登山において雪崩は登山者最大の関心事である。その場合、雪崩に関する基本的理解や、雪についての基礎的な知識がないと、雪崩についての判断はできず、危険な行動をとることになる。

今回のシンポジウムでは、どのようにして雪崩を予知し、これに対処すればよいか、被害を最小限に食い止めるためどんな対策が必要かなどについて議論を行い、少しでもより安全に、積

雪期登山を展開して行くことができればと期待している。

記

日時 平成四年十一月二十八日(土)

午前十時〜午後五時

場所 青山学院大学会議室(正面入口に会場案内板あります) 地下鉄表参道またはJR渋谷駅下車

会費 一〇〇〇円(予稿集代他)

演題と講師

(1)登山者のための雪崩学

日本雪氷学会雪崩分科会長

新田隆三

(2)雪崩事故の教訓から

労山 雪崩遭難対策委員

中山建生

(昼食一二・三〇〜一三・三〇)

(3)雪崩現場での捜索

労山 雪崩講習会主任委員

松葉桂二

(4)雪崩遭難をなくすために

日本山岳会遭難対策委員

松永敏郎

(5)パネルへの質疑応答

講師全員

主催 科学研究委員会

### ●名作山岳映画会の夕べ

主催 フィルム・ビデオ委員会

日時 十一月六日(金)午後七時より

### ●平成四年度年次晩餐会

のお知らせ

今年も年次晩餐会を左記の要領で開催します。くわしくは次号でご案内致しますが、翌日の懇親山行とあわせて、ご期待下さい。

日時 平成四年十二月五日土曜日

午後六時開宴

会場 新高輪プリンスホテル

場所 本会ルーム 茶葉代 五〇〇円

上映作品 福原健司作品

※『私と尾瀬』 植物学者・武田久吉(当会元会長)氏の尾瀬への思いをおりませながら、尾瀬の自然を紹介する。

※『山男』 立山の歴史と自然を促えながら立山に生きるガイド達の活躍を描く。

今回は福原健司氏のご好意で貴重な作品を上映いたします。

五十分

三十分

十分

十分

十分

十分

### ●冬山で遭難しない為の講演会

題目 積雪期の剣岳黒部を巡る登攀

講師 和田城志

期日 十一月二十七日(金)六時半より

場所 山岳会集会室

## 書籍・雑誌 受入報告 1992年7月

| 著 者             | 書 名/雑誌名                        | 版型・ページ           | 出版元       | 出版年  | 寄贈/購入別         |
|-----------------|--------------------------------|------------------|-----------|------|----------------|
| 山田 格            | 飯豊連峰懷想賦                        | A 5/366 p.       | 山田 格      | 1992 | 著者寄贈           |
| 佐野敏郎            | 清水の文学碑                         | A 5/62 p.        | 佐野敏郎      | 1992 | 著者寄贈           |
| 山本侔介            | 山ありて旅ありき                       | 四六/308 p         | 近代文芸社     | 1992 | 著者寄贈           |
| 夢自然編集部          | 夢自然・草木/夏                       | A 4変型/111 p.     | 山と溪谷社     | 1992 | 発行所寄贈          |
| 内田良平            | カトマンズ百景                        | B 5/128 p.       | "         | 1992 | "              |
| 根深誠編著           | 白神ブナ原生林からの報告・森を考える             | 四六/533 p.        | 立風書房      | 1992 | "              |
| 志水哲也            | 大いなる山・大いなる谷                    | 四六/306 p.        | 白山書房      | 1992 | "              |
| 高瀬保(編)          | 越中立山古記録                        | A 5/320 p.       | 立山開発鉄道(社) | 1992 | "              |
| HAT-J 国際会議編集委員会 | 山岳環境保護国際シンポジウム東京会議 1991 報告書    | B 5/282 p.       | HAT-J     | 1992 | "              |
| 日本雪氷学会          | 第3回雪崩対策の基礎技術研修会テキスト            | B 5/189 p.       | 日本雪氷学会    | 1992 | "              |
| Dickernan, Pat  | Adventure Travel North America | 23.5×15.5/288 p. |           |      | Adventar Guide |

訂正 八月号(五六七)十四頁の第三十四回有志閑談会の記事、見出しの涵徳停は涵徳亭、山本朋三郎さんの発言は「今年十四回目のネパール、初めてのチベット入りを目指す」の誤りにつき訂正いたします。(高田)

同号十六頁三段最後の行、募金者芳名中、室次男を室次雄が正しいので訂正いたします。

編集後記 十月号の編集作業は九月九月に入ってから行事の記事が幾つも入っているのに気づくだろう。衛星通信、FAXと編集にもかなり速報性が出せるようになったのが嬉しい。願わくば筆者諸兄姉も速筆かつ簡潔な文章を送って欲しい。(A・O)

平成四年十月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五—四

サンビュウハイッ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田 二郎

編集代表 小 倉 厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三—四八二九番

東京都港区赤坂一—三—六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂